平成 28 年 10 月 1 日発行
No.304

Shining
シャイニング

発行元：社会福祉法人 拓く
TEL　0942-27-2039
FAX　0942-27-2086
http://h-polepole.com

グループホーム防災担当

災害に備えましょう！まずは自分たちでできることから

大規模震災、台風、異常気象によるゲリラ豪雨など災害をとても身近に感じるようになってきました。災害時、私たちはどう考え、行動するのか…。今回、初めて災害時について、利用者さんと職員全員を対象にしたアンケート調査を行いました。

アンケート結果から、しっかりと考え準備されている方、まだ考えておらず何の準備もされていない方など、住宅環境、家族環境、障害程度により意識に大きな差があることが分かりました。

全体的な傾向として「障害があり、周りに迷惑なので避難しない」「避難所にオムツを換える場所があるのか」「車イスで入れる避難所なのか」「ミキサー食、オムツの確保が心配」など、特に障害が重い方々は避難したくても、できないのではという不安が目立ちました。また、職員の中には、「災害時は自分たちの家族のことで精一杯で法人施設に駆けつけられない」と回答される方も多く、現実問題として誰に助けてもらうかは、大きな課題だと感じました。利用者さんの中には「近くの親戚にお願いしてある」「地域の要支援者リストに登録している」などの近所の自助・互助をしっかりと意識し、準備されている方もいました。

このアンケートを受けて、重い障害がある方たちが被災した際の避難については大きな課題だと感じました。まだ災害について考えておられない方もおられます。避難所の様子を確認しておく、サポーターを確保しておく、必要な備蓄をしておくなど、自分たちでできることから準備をはじめる必要があるのではないでしょうか。法人として、備蓄するものを見直す機会になりましたし、災害時にどんな役割を果たせるか、計画準備をしておきたいと思います。

（グループホーム防災担当：白數 直基、本部長：浦川 直人）

今後のグループホーム

周りの人たちと支え合いながらの暮らしを考えよう

6月、グループホームに入居されていない利用者さんの保護者・兄弟姉妹の方々に、今後のグループホームについてお話をさせていただきました。次のように、率直な思いやご意見をお聞きすることができました。

●本人に力をつけたい。

●親戚や隣近所とのかかわりがない。

●わが子は何歳まで生きるのだろうか、将来が不安。

●サービスに頼るのではなく、もう一回、みんなで助け合わないといけないのかな。

●親が元気なうちに子どもの行き場を見つけてあげたい。

●お父さん向けの勉強会があったらいいな。

●親が突然倒れてもいいように、子どもの将来について準備をしておきたい。でも、どうしたらいいか分からない。

●健常者の若者も厳しい状況の中、この先どうなるのだろう。

●時折、短期入所を使いながら基本的に自宅で過ごさせたい。

●子どもより後に死にたいと思っている。

●ポレポレではなく、他の事業所を使うように勧められたが、ポレポレにお願いしたい。

●親子で一緒に助け合いながら暮らす方法はないか。

●この家はどうなるかと考えることもある。

●父母だけで考えるのではなく兄弟姉妹にも相談してほしい。父母に何かあった時、兄弟姉妹としても、本人をどうしていいかわからない（姉妹談）。

共同体としてスタートした当法人に、暮らしの場を期待されていることもよく分かりました。しかしながら、国の情勢をみると、利用者全員の暮らしの場を作り続けることはできません。そこで、今からは、ご家族との暮らしを維持しながら、地域生活を継続できる方法も模索する必要があると思います。サービスだけではなく、周りの人たちと支えあいながらの暮らしになるのではないでしょうか。今、法人拓くでは、次世代につなぐプロジェクトでスタッフ一人ひとりが「拓くの魅力」を考え、これからのことを話し合っています。これまでの歴史の継承とこれからの時代にあった事業展開を考え、ご本人やご家族、また地域に必要とされる居場所をつくっていきたいと思います。

（統括本部長　北岡　さとみ）